# 「何を語り伝えるのか」

使徒言行録２：12－36

２０２３年6月４日
野村　友美 師

＜就任式に向けて＞

６月最初の日曜日になりましたね。
先週からいよいよ梅雨が始まったそうで、季節が進んでいるのを感じます。
今日はこの礼拝の後、午後２時から私の牧師就任式が行われます。改めまして、これからもよろしくお願いいたします。

この呉教会に遣わされて２ヶ月が経ちましたから、「もう慣れましたか？」と最近よく聞かれるようになりました。慣れましたか？と聞かれるたびに、私はいつも「どうだろう、慣れたかな？」とちょっと考えてしまいます。教会の皆さんとは少しずつ、お互いに馴染んできたでしょうか。呉の町の様子もだんだんわかってきて、フレスタのポイントカードやゆめタウンのアプリも持ち始めました。教会の車のフットブレーキのことも、ちゃんと覚えました。慣れてきたと言えば、慣れてきたのかもしれません。でもまだまだ知らないことがたくさんあるでしょうし、もっといろんなことやいろんな方との出会いが、これから先も待っていると思います。

その一つ一つを神様と、そして皆さんと一緒に受け止めながら、少しずつここに根を下ろしていければと思っています。

＜初めてのメッセージ＞

さて、今日の聖書の場面は、イエス・キリストというお方について語られた初めてのメッセージ、世界で最初のキリスト教会のメッセージとも呼べるものです。
十字架で死なれたイエス様が復活して、弟子たちの目の前で天に上げられてからおよそ１０日後。五旬祭というユダヤ教のお祭りの日に、集まっていた弟子たちにイエス様が約束していた聖霊が降ってこられました。聖霊を受け取った弟子たちは、神様がなさった偉大な出来事について、聖霊が語らせるままに、いろんな国の言葉で話し始めました。いろんな国からお祭りに来ていた人たち全員に伝わるように、人々が生まれ育ったそれぞれの国の言葉で、神様のことが証言されたんです。
１２０人ぐらい居た弟子たちが一斉に、しかもそれぞれに違う言葉で話し出したんですから、賑やかどころじゃない大騒ぎだったでしょう。この大騒ぎを聞いて、たくさんの人たちが「いったい何事だ？」と集まってきました。そして彼らはみんな、この不思議な光景にただただびっくりして、「これは一体どういうことだ？」と言い合いました。その中には、「この人たちはきっと、新しいぶどう酒で酔っ払っているんだ」と決めつけて弟子たちを馬鹿にすることで、無理やり自分を納得させようとする人たちもいました。でもやっぱり、そ

れだけじゃとても説明がつきません。
何が起きているのかわからなくて混乱する人々を見て、ペトロと他の１１人の使徒たちが立ち上がった、と聖書は今日の場面を描いています。
仲間たちと一緒に立ったペトロは、大混乱の騒ぎの中でもその場のみんなに聞こえるように、声を張り上げて話し始めました。
ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち。初めにそう呼びかけて、ペトロは自分が誰に向かって話しているのかをまず伝えます。
ユダヤ人たちと、エルサレムに住むすべての人たち。それは、この時ペトロの周りにいた全員を指名する呼びかけでした。
ペトロと他の弟子たち、そして集まってきた群衆はみんなエルサレムの町なかにいました。
　五旬祭を祝うために、いつもはあちこちの国や地方に住んでいる大勢のユダヤ人たちが神殿があるエルサレムに集まって来ていたんです。ユダヤ人だけじゃありません。イスラエルの神様を信じた外国人の改宗者たちも、その場にいたことを聖書は伝えています。これから私が話すことは、ここにいるあなたたち全員に向かって話しています。そう呼びかけることで、ペトロはその場にいるすべての人に、
「あなたたちの誰も、今から話すことに関係ない人はいないんですよ」と宣言しているんです。全員に関係あることです、しっかり聞いててくださいよ、と念押ししてペトロは話を始めました。
　今はまだ朝の９時なんだから、もちろん私たちはお酒で酔っ払ってなんかいません。あなたたちが見ているのはそんなことじゃなくて、預言者の言葉が実現した出来事なんです。そう言って、ペトロは預言者ヨエルの言葉で、人々にこの状況を説明しています。当時の人たちにとっての聖書、私たちが旧約聖書と呼んでいる文書のヨエル書第３章に、ここでペトロが引用した言葉が書かれています。罪の支配が終わる日、神様からの救いが成し遂げられるその日には、特別な人たちだけじゃなくて、すべての人に聖霊が与えられる。あなたたちの息子や娘も、若者も老人も、僕もはしためも、つまり年齢も性別も社会的な身分も超えて、あらゆる人が聖霊によって神様の言葉を伝えるようになる。予想を超える出来事と混乱の中で、それでも神様に信頼して助けを求める人は皆、救われる。
そう預言したヨエルの言葉がまさに今、あなたたちの目の前で実現したんだ、とペトロは人々に向かって語りました。
そして、彼らがナザレ人イエスとして知っている人物こそ、神様から遣わされた救い主、メシアだということを証言し始めたんです。

＜何を語り伝えるのか＞

神様がイエス様を通して、イスラエルの人たちに奇跡や癒しをお見せになったこと。そのイエス様が、イスラエルの指導者たちに捕らえられて、ローマの役人に引き渡されて十字架刑で殺されたのも、神様の計画の中に入れられたこと。その十字架での死から、神様がイエス様を復活させられたこと。イエス様の出来事の一部始終、特にイエス様の復活について、ペトロは聖書の言葉と照らし合わせて、ダビデ王が預言した詩篇の言葉の実現として語っています。ペトロのメッセージを聞いている人々はみんな、彼が引用した預言者の言葉やダビデ王の詩篇に親しんで生きている人たちでした。ユダヤ人たちは小さい頃から、聖書の言葉を教えられて育っています。

ユダヤ教に改宗した外国人たちはそれこそ、聖書の言葉に人生を変えられた人たちです。だからその場にいた人々にとって、このペトロのメッセージは、今の私たちが感じるよりもずっと身近でわかりやすくて、それだけにものすごく衝撃的だっただろうと思います。

先祖代々受け継がれてきた、あの救いの預言が実現していた！それだけじゃなくて、自分たちが期待して願っていたのとは全然違う予想外のやり方で神様は救い主を遣わしておられた、と知らされたんです。

偉大なダビデ王の再来としての救い主、メシアを、人々は長い間待ち望んでいました。

神様の力で戦って、他の国の支配からイスラエルを救い出してくれる、強い王様。

それが、人々がずっと期待していたメシアだったんです。でも聖書が約束していたメシアはそうじゃなくて、ダビデ王よりもはるかに偉大な方、死を超えて復活して、

神様の右の座に上げられたイエス様だ、とペトロは人々に証言しました。

そして、そのイエス様を十字架につけて殺してしまったのはイスラエルのすべての人、他の誰でもないあなたたちだ、と人々に突きつけたんです。ここで忘れてはいけないのは、このメッセージを語っているペトロ自身もまたユダヤ人で、イエス様を十字架につけたイスラエルの一員だということです。

ペトロは自分を棚に上げて、同胞たちの罪を裁いているわけじゃありません。イエス様が捕らえられたあの夜、怖くてイエス様を置いて逃げ出してしまったことも、夜明けを告げる鶏が鳴くまでに３回も「イエスなんか知らない、私は関係ない！」と

言ってしまったことも、ペトロはまだ生々しく覚えていたはずです。

自分もまたイエス様を十字架につけた罪人だ、とペトロはつくづく思い知っていたでしょう。その上で、ペトロはイスラエルの同胞たちに呼びかけているんです。

こんな私にもイエス様は聖霊を与えてく

ださった、あなたたちは今まさに神様からの罪の赦しと救いを目の当たりにしているんだ、と自分も同じ罪を背負う者として、ペトロは訴えているんです。
「あなたがたがイエス様を十字架につけた」と宣告するペトロの言葉は、人々をただ裁くためじゃなくて、罪からの救いを人々に手渡すための言葉でした。イエス様の十字架での死と復活も、罪からの救いも、約束の聖霊も、全部あなたたちに関わることなんだと、ペトロは愛する同胞の一人一人に伝えているんです。

聖霊がペトロに語らせた言葉、救い主イエス様を語り伝える言葉を聞く人は誰もイエス様と無関係ではない。この証言を聞くすべての人に、神様からの愛と救いが差し出されている。
これが、世界で最初に語られたキリスト教会のメッセージです。
教会はこの時から今に至るまで、聖霊によってこのペトロのメッセージを語り伝える弟子たちの群れです。

今日の聖書の物語は、もう一つ大事なことを私たちに伝えています。このメッセージをペトロは、たった１人で語ったんじゃありません。ペトロが語り始めた時、他の１１人の使徒たちもペトロと一緒に立ち上がりました。立っていただけと言えばそれまでですが、これも結構な勇気がいることだと思います。ペトロと一緒に立つことで、彼らは自分たちがペトロの仲間だと表明しました。一言も話さなくても、一緒に立っていてくれる仲間たちの存在はペトロを励まして力づけて、語り終わるまでずっとペトロを支えていてくれたでしょう。何も話さなくても、ペトロと一緒に立ち続けるその姿で、１１人の使徒たちはペトロと一緒にイエス様のことを証言しているんです。それぞれの言葉を、行動を、時には存在そのものを、聖霊が一つのメッセージにして救い主であるイエス様を証言させてくださる。始まりの時からずっと、教会はそういう共同体でもあるんです。
だから今ここに招かれている一人一人を通して、このメッセージを受け取っている一人一人を通して、聖霊が神様からの愛と救いを表してくださることを私は信じます。
聖霊の働きに期待しながら、今日も私たちは一緒にここから新しい一週間へと
歩き出していきましょう。
お祈りいたします。